

# 新型インフルエンザパンデミック時における 社会不安最小化に向けての対策

大学の場における検討

勝 田 吉 彰

How to Minimize the Psychological Effects of Pandemic Flu  
Investigation at University

Yoshiaki KATSUDA

## Summary

Many reports predict that a new type of influenza pandemic (pandemic flu) could soon affect the whole world. When a pandemic strikes, the general population is severely influenced by psychological effects caused by the disease, and daily lives are seriously damaged.

This report investigates how to minimize the psychological effects of a pandemic. In a university setting, both the containment of the infection and the management of information, including unfounded rumors, are indispensable.

**Keywords:** pandemic flu, avian flu, SARS, psychological effect, university

新型インフルエンザ、鳥インフルエンザ、SARS、心理的影響、大学

## はじめに

現在、鳥インフルエンザの遺伝子変化から新型インフルエンザが発生、そのパンデミック（大流行）がWHOから警告されている<sup>1)</sup>。新型インフルエンザに対しては免疫を持つ者はなく、パンデミック時には全世界で6200万人の死者が発生するとの試算もある<sup>2)</sup>。

このような状況下、大きな社会不安の発生が予想され、若年層の割合が高い大学の場においては他にも増して何らかの対応が迫られる。

本稿では、パンデミック発生時に大学内で予想される問題を検討し、考察を行った。

## 大規模感染症流行における心理的反応 SARS の経験から

新型インフルエンザパンデミック発生時の社会不安

を検討するにあたり、2003年にSARS禍の猛威に見舞われた北京における一般市民・在留邦人の心理的反応が参考となる。当時の北京では“SARS 5つのP”と分類される5段階の心理的反応を辿った<sup>3)</sup>(表1参照)。中でも「事実が白日のもとにさらされ激震が走る」SARS Panic段階から「事実ではない噂・信念が流布する」SARS Paranoia段階へ移行し、「患者とすれ違っただけで感染する」「会社に患者発生したらしい。近づいたら危険」などといったものが流れ、繁華街から人影が消失しゴーストタウン状態となるに至った。更には、「北京市が封鎖され、食糧が入手出来なくなる」との噂から、スーパーや食料品店に市民が殺到し、店の棚がカラになる事態も発生した。これらの現象が発生した背景には、初の大規模感染症流行にノウハウが無く有効な社会不安対策が打てないまま移行してしまった面が大きく、この経験を踏まえ、新型

表1 SARS 5つのP

5つのP	時期	内容
SARS Phobia	3月20日頃～	公式情報と噂の乖離から不安・恐怖拡大
SARS Panic	4月20日頃～	公式発表数字跳ね上がり雰囲気一変、恐慌状態
SARS Paranoia	4月下旬～	「事実ではない噂/風説/信念」ひとり歩きし訂正不能
SARS Politics	5月中旬～	援助や調査研究で来訪者増え政治的動きも
SARS PTSD	6月～	患者・周辺・一時帰国者のトラウマ体験語られる

インフルエンザパンデミックにおいては、いかに情報を効果的に伝え迅速に対策を打ちParanoia段階を最小化するかがカギとなる。

### SARS 流行時における北京の大学

北京を含め中国の大学は一般的に校舎・学生寮・職員宿舎・商店・厚生施設群が広大に広がる同一敷地内に配置されており、門のところで人間の出入りを制御することが可能である。

SARS 流行に見舞われた北京市内各大学では、門を封鎖し人間の出入りを極端に制限した。すなわち、大学構内に入れるのは学生証・職員証を所持した関係者に限定され、門衛詰所で体温測定にて発熱が無いことを確認の上入構を許された。さらに、内部の寮居住者も緊急時のをぞき原則的に外出は制限され、食糧は3食、政府機関により供給された。

### 大学における対応

大学の場には1) 教室を中心とする教育機関 2) 学生寮を中心とする居住機関 3) 市民公開講座等のコミュニティ機能があり、それぞれをターゲットに対策を検討する必要が生ずる。

#### 1. 講義室

新型インフルエンザウイルスは飛沫感染を基本的に空気感染も認められ、講義室のような限られたスペースに多数の人間が密集する条件では広範に感染拡大の可能性が高い。新型インフルエンザ感染拡大の第一報が報じられればただちに校舎入口において検温を実施し発熱者を校舎に入れない措置を実施し、また、所在する地方内でフェーズ4以降に相当する状況の発生が見られれば休講措置を講じ、不特定多数の出入りが想定される公開講座等は中止することが望まれる。

#### 2. 学生寮

24時間生活の場となる学生寮においては、発病者の隔離が必要となる。インフルエンザウイルスは発症後

3～4日間でウイルス排出のピークで他者への感染源となり<sup>4)</sup>この期間の隔離が鍵となる。速やかに指定医療機関に入院させるのが原則となるが、その受診までの時間も感染拡大の可能性は高く、寮内に一時隔離区域の設定等の処置も必要となる。

また、パンデミック時にはライフライン不通の可能性もあり、米CDC、日本厚生労働省も一般家庭は2週間分の食糧備蓄を呼びかけている<sup>5)</sup>。学生個々人の危機意識にはばらつきもあり、寮運営者の責任での食糧備蓄も必要であろう。

#### 3. 外部実習・フィールドワーク

理学学部・医療系学部では工場・医療機関・福祉施設等での実習を通じて、また、文系学部においてもフィールドワーク等を通じて不特定多数と接触する機会が考えられる。この中で実習施設内不特定多数から実習生への方向のみならず実習生から実習施設内不特定多数への方向にも感染拡大の可能性を考慮する必要があり、早い段階での中止が望ましい。

#### 4. 医療機関との協同

パンデミック時点では患者の大量発生により、医療機関の対応能力を超える事態も懸念されており、そのような状況下ではある種「コネクション」的なものも必要と想定される。近隣医療機関との関係づくり、大学関係者枠のベッド確保交渉を事前に行うことが望まれる。

#### 5. 休講対応

パンデミック発生時は速やかに休講を行う必要があり、実習等まで含めた休講時の取扱を事前に明確化し発表しておくことが望まれる。特に、学則上、出席回数と進級が連関する規定が存在する場合や実習と資格要件が連関する医歯薬看護・福祉系においては、多少の症状が出現していても無理して出席してしまう事態も考えられ、感染拡大の重大なリスク要因となりうる。休講後や実習中止後の取扱いについて学生のキャリアに不利益のおよばない方策を前もってに確定し通知し

ておくことは重要であろう。

#### 6. 事実ではない噂・風評対策

大規模感染症流行下では様々な「事実ではない噂・信念」が流れ、それが数字に表れる被害を上回る実質的被害をもたらすため、物理的封じ込め策と並行して心理的影響への対策がとられねばならない。

##### i) 情報提供

SARS 流行時に「事実ではない噂・信念」が拡大した背景には正確な情報が得られないことがあり、きめ細かい情報提供を行うことが望まれる。パンデミック発生時には厚生労働省や国立感染症研究所から情報提供が行われ報道されるものと思われるが、若年層においては活字メディアや放送メディアになじまない層もあり、まとまった情報を理解することが困難なケースも想定される。したがって、「一口サイズ」に切り分け咀嚼した情報を携帯メールで配信するのが有効と思われる。

##### ii) 噂の拾い上げ

学生課・学生相談室・厚生課その他学生と直接接する関係部署を総動員し「事実ではない噂・信念」を拾い上げ、その訂正情報をこまめに i) のルートで提供することも不安対処の上で有効と思われる。

#### 7. 情報提供のあり方

大学構内にて深刻な社会不安を発生させないために、情報提供のあり方が鍵となる。新しい感染症が発生した場合、日々新しい情報が発表され、極端な場合には数日前に発表された情報が否定されることも稀ならず発生する。このような状況下、情報はその時点でわかっている事からいわば「一口サイズ」にして直接個人

に届くような形で提供されることが望まれる。具体的には、携帯メールを使用し、毎日、その日の状況・基礎知識の反復といった内容を繰り返し提供を行う。

パンデミックは第二波・第三波と波状の発生も予想されており、それぞれのケースに応じて検討が必要となる。

### まとめ

新型インフルエンザパンデミック発生時の対応について検討した。パンデミック発生時は 感染拡大防止と パンデミックの及ぼす心理的影響の 2 方面を見据えて対策を打つ必要があり、 に対しては物理的封じ込めを に対しては木目細かい情報提供と「事実ではない噂」対策が重要となる。

- 1) [http://www.who.int/csr/disease/avian\\_influenza/en/](http://www.who.int/csr/disease/avian_influenza/en/)
- 2) Murray DL, Lopez AD, Chin B et al: Estimation of potential global pandemic influenza mortality on the basis of vital registry data from the 1918-20 pandemic: a quantitative analysis. The Lancet 368: 2211-2218, 2006
- 3) 勝田吉彰：大規模感染症流行における心理的反応と対策 SARS の経験から新型インフルエンザへ . 臨床精神医学, 35 (12), 1719-1722, 2006
- 4) 岡田晴恵、田代 眞：感染症とたたかう インフルエンザと SARS , 22, 岩波新書, 2003
- 5) <http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekaku-kansenshou04/09.html>